

会 議 録

会 議 の 名 称	西東京市教育委員会いじめ問題対策委員会（第1回）
開 催 日 時	令和元年5月24日(金) 午前10時から11時まで
開 催 場 所	保谷庁舎3階 第2会議室
出 席 者	堀米 孝尚（武蔵野大学教育学部教授）、森山 徹（むさしの発達支援センター 所長、臨床心理士）、入海 英里子（社会福祉士、自由学園スクールソーシャル ワーカー） 欠席：岩崎 昭（新銀座法律事務所弁護士）
事 務 局	内田 辰彦（教育部教育指導課長）、宮本 尚登（教育部統括指導主事） 鈴木 章郎（教育部教育指導課指導主事）
議 題	西東京市におけるいじめに関する取組について いじめ防止に係る取組等について いじめの早期発見及び未然防止の取組について
会議資料の名称	西東京市におけるいじめに関する取組について
記 録 方 法	<input type="checkbox"/> 全文記録 <input checked="" type="checkbox"/> 発言者の発言内容ごとの要点記録 <input type="checkbox"/> 会議内容の要点記録
会 議 内 容	
<p>(進行) 鈴木指導主事</p> <p>○教育委員会挨拶 木村教育長</p> <p>○西東京市におけるいじめに関する取組について (鈴木指導主事) ・資料の説明 (入海委員) ・教育委員会主催の研修があった上で、各教員は各学校でいじめの対応方法や法律等の研修を行うんですね。 (堀米委員) ・一昨年度までは生活指導主任がいじめ問題スペシャリスト研修の対象でしたね。 (宮本統括指導主事) ・二年連続で生活指導主任を対象とし、昨年度と今年度は副校長を対象にしている。来年度以降は対象を変えようと考えている。 (堀米委員) ・伝達研修を兼ねているんですね。 (宮本統括指導主事) ・スペシャリストを養成して、そのスペシャリストが伝達研修する。 (内田教育指導課長) ・伝達研修を行った上で、年3回いじめに関する授業を全学級で行っており、いじめに対する意識を鈍らせないように取り組んでいる。</p> <p>○いじめ防止に係る取組等について、いじめの早期発見及び未然防止の取組について (鈴木指導主事) ・他自治体でのSNSいじめ防止アプリに関する事例の紹介。 (宮本統括指導主事) ・費用対効果を考えると、学校にいる時間はチャット形式で使用できないとすれば、情報提供だけのための使用となり、メールと変わらないようにも思えるが、メールとの違いについて皆さんのご意見をいただきたい。 (森山委員) ・アクセスコードが発行されて、何かあったときにはここにアクセスして情報提供すると学校にSOSが出せるという意味では、子どもたちにとっては安心感をもたらすと思う。メールはハードルが高くて、他自治体でやっているところではこないんです。 ・メールはメールアドレスがオープンになってしまうので、西東京市以外のところからメールがきてしまうことに関するリスクが大きい。結構深刻な他の自治体の子どもからくると放っておけなくなり、指導主事の業務が自分の自治体ではないところの連絡に費や</p>	

されることが、メールの欠点である。このシステムは自校の問題しか入ってこないのです。そんなに抵抗感はないと思います。

(堀米委員)

- ・学校にはわかってしまうんですね。

(入海委員)

- ・自分の身を知らせたくない場合はメールアドレスも知らせたくない。

(鈴木指導主事)

- ・学校に話していいですかというやり取りをして、いいですよというふうにして学校に報告する場合もあるようですが、学校に言わないでくださいという場合は、その担当者のやりとりがずっと続くような形になっている。

(堀米委員)

- ・その自治体では6人で対応しているのですか。

(鈴木指導主事)

- ・そうですね。

(内田教育指導課長)

- ・費用では1人300円のアプリの利用料よりも6～7人を雇う人件費の問題の方が大きいですね。

(宮本統括指導主事)

- ・いじめられている子とか、あるいはいじめを見ている子、それぞれ状況はまったく違うわけですが、匿名でうまく解決してもらおうということに期待をかけるということなんですかね。

(入海委員)

- ・子どもたちのほうがこういうものについて詳しいし、色々な子どもたちから率直に声を聞けると、こういうものを使うときにも良いと思います。

(森山委員)

- ・教育委員会あるいは学校が子どもに何をするかよりも、子どもたち自身がどう自分たちの問題として解決していくか、予防していくかというそういう仕組みが現場にないと子どもたちにとっては与えられるものでしかない。子どもたちの側に議論する場があって、そこに例えばこういう情報を提供するような、教育の本体の問題として考える施策があると面白い。

(入海委員)

- ・周囲の子どもたちがみんなでいじめを本当になくしていこうと一生懸命に考えている風土を作っていくことがひとつの抑止になる。

(森山委員)

- ・学校現場で主体的に子どもたちが自分たちの問題として取り組むという活動にどうシフトしていくかということが新学習指導要領にも合致してくると思うし、そういう取組に少しずつ視点を変えていく時期だと思う。

(堀米委員)

- ・学級活動の問題としてとらえると、人間関係作りをちゃんとすることによりいじめの問題を自分たちのこととして受け止められるようになる。主体的な学習活動とともに特別活動をきちんとやるのが大切である。

(森山委員)

- ・中学の学級活動は行事の一致団結圧力なんですよ。班決めとか目標決めとか。多様性と言うのであれば、みんな仲良く指導している土壌そのものを疑っていかないと。そのときにみんな仲良くじゃない言葉は何か。みんな活かし合おうとか。そういう学校文化そのものがいじめというものを生みやすい学校となっているということをごまかすことができるか。

(入海委員)

- ・いじめのこと等で学級に入って色々コーディネートしたり子どもの声を拾ったりとかすることがあるんですけど、よくしつけられているな、面白くないなとか、先生たちが好きな答えを出すとかとまあとあえずこの場が終わるみたいな感じの答えになるんです。でも本当の声はそこじゃなくてもっと面白いのあるよねというのを出してもらうのに実はすごく時間がかかるし、そこに工夫ポイントを置かなければいけないんだろうなと思います。教員問い直しです本当に。先生たちは何回やっても同じような学級目標が好きだし、それを出してもらいたいのかな。

(森山委員)

- ・もうひとつ特別支援教育の観点でいうと、先生たちの仕事は福祉の場合では個別ニーズに対するアプローチだったりするけれども、その子が参加できる授業をどう作っていくか、その子が位置づけられる学級集団はどういうものかという視点が欲しい。つまり、特別支援教室が発達障害の子達の息抜きの場じゃなくて、在籍級にこそどう足場を作るか。

(堀米委員)

- ・特別支援学級についてはどうしても若手が入らざるを得ない。そこからスタートしていく初任者は今年も多いのでは。

(内田教育指導課長)

- ・多いです。初任からの方と、初任初異動の方が特支の教員の6～7割ぐらいの割合です。

(堀米委員)

- ・ただ、特別支援教育を経験することが、その先生にとってとても大事なことなんです。

(内田教育指導課長)

- ・それがずっと形になっていくと、若手のうち何年かは必ず特別支援教育を経験して、通常学級の指導に入っていけば、通常学級の指導の中で特別支援教育の個別に配慮する視点に立った指導がどの教員も若手のうちに経験した上でやることになるので、またさらに専門性を高めたいとそっちのほうにいく人も出てくると長い芽でみれば仕組みとしては悪くない。

(森山委員)

- ・先生方が一番苦手になっているのは能力差のある集団を見ることなんです。できるだけ均一にしておきたい。なかなか学びの主体を子どもに渡せないという状況になるんだと思います。能力差のある集団をそれぞれ伸ばしていくというようなことは、現場の研修として一番力を入れていく。特別支援教育はもう前から発達障害は障害って医者が診断しなくなっているんで、そういう意味でいつまで障害児教育って言うのかっていう議論をそろそろやらないと。発達の特性のある方たちはニューロダイバースな人材といって企業が奪いにきています。お互いにどう活かしていくかという価値をどうやって学校文化に根付かしていくか、すごく大きなテーマで施策を展開していくと、実ははじめもその枝葉であるし、特別支援もそうだし、本体の方はみんなが参加可能な仕組みをどう作るかそういう大きな幹を作っていくと方向性が明確になる。

(入海委員)

- ・一つの考え方としてずっとあるのが、子どもを学校に合わせるという考え方。学校は子どもには合わせないというか。不登校は子どものせいであって、学校は変えようとしないうところがある。合理的配慮を難しく考えるのではなくて、子どもの側に学校を合わせる、全体の子どもたちがいられるように学校のシステムを合わせていくという発想がいままでなかなか無かった。

(堀米委員)

- ・自由にご意見いただきましたが、もう時間になりました。事務局から連絡がございます。

(鈴木指導主事)

- ・本日はありがとうございました。次回は令和2年1月30日(木)午前10時～11時を予定しております。

(堀米委員)

- ・それでは第一回いじめ問題対策委員会を終わります。ありがとうございました。

以上